

2023年3月11日発行

民話「子育て幽霊」の伝承に関する考察

宮 田 穰

相模女子大学紀要 VOL.86 (2022年度)

民話「子育て幽霊」の伝承に関する考察

宮 田 穰

Study on the Tradition of the Folk Tale " A Ghost Caring for Her Baby "

Minoru MIYATA

Abstract

In today's internet society, there are fewer opportunities for storytelling through face-to-face communication. The purpose of this research is to re-evaluate the communication value of folk tales and other stories that have been passed down orally over time in this changing media environment.

In this research, I first focused on one of the folktales that have been handed down orally since ancient times, " A Ghost Caring for Her Baby ," and compared and examined the contents of traditions passed down in various places. As a result, I found that the common parts of the content that has been handed down are limited, and that the content has been considerably arranged depending on the region. In other words, in order for stories to be handed down from generation to generation through oral tradition, it is necessary to have the flexibility to freely arrange the content according to each region, except for the core parts of the story that serve as attractive motifs. This point is also unique to oral tradition.

Also, even today, we can find various values of oral communication. It is to create common topics that transcend generations, to enjoy communication with physicality, and to be able to use it for regional PR such as "community development".

Key words : Folk Tale, Oral Communication, Non-verbal, Personal Communication

1. 本研究の背景と目的

インターネット利用が日常化している現代において、人が人へ直接伝えるコミュニケーションが、どんどん少なくなっている。一方、若者世代に限らず多くのコミュニケーションが、SNSなど便利なネット・メディアに置き換わっている。このような日本社会のメディア環境変化の中で、口承でのコミュニケーションの価値を再評価してみたい。

なぜなら、口承は人間が最も古くから持ち続けているコミュニケーションの基本スタイルであり、世代を超えた共有力や時代を超えた伝承力が、現在もなお必要だと考えるからだ。

そこで本研究では、まず古より口承で伝えられてきた民話に注目し、伝承されていく仕組みについて考察する。その際、伝承の過程で変わりゆくものと変わらないものを、しっかり見極めていきたいと考えている。

2. 民話とは

口承文芸には、昔話や伝説など民話と類似した言葉がいくつかある。まず、前提としてその関係を整理しておく。

民話とは、「第二次世界大戦後、一般に昔話と伝説とをまとめて「民間の説話」の意味で、「民話」と呼ぶことが多く、しばしば昔話と同義語として用いられる。」(『日本昔話ハンドブック新版』p.11)

そして、昔話と伝説の違いとして「昔話は、核心となる1つのモチーフ—主要登場者の1つの行為を中心に構成され、文芸としての一定の型(タイプ)を物語の単位として持っている。…これに対し、伝説・神話は、人物や山・川・池などの具体的なものに結びついて、それが事実存在したことと信じる人々によって伝承される。」(同p.11)

以上を踏まえると、民話は範囲が広く、物語としての多様な型を持つものだと理解できる。なお口承文芸には、民話以外に「民謡、語り物、唱えごと、ことわざ、なぞなぞなど」がある。(同p.241)

伝承というコミュニケーションについては、昔話を象徴として次のように説明されている。

「昔話は文芸であり、その文芸性は伝承をるつぼとして練られてきた。…語り手は幼い聞き手を喜ばせようとつとめる。彼らの気にいる内容に整え、わかりやすい表現や言葉を用い—つまりは古い話を新しい世代に合わせて語り変えるのである。…まとめていえば、文学の創作が作家個人の密室での営みであるのに対し、昔話文芸は、語り手と聞き手が伝承の中で何世代、何十世代もの営みをへて練り上げてきたのである。」(同p.17)

もちろん、昔話には外国から書物により文字を通して伝播してきたものもあるが、それらも口承により祖父母や親たちから子へと伝承されて、各地へ広がっていった。始まりは文字であったとしても、その物語は口承の過程でどんどん練り上げられ、変化していったと考えられる。

3. 民話とコミュニケーションの関わり

コミュニケーションの視点から民話を捉えると、どのようになるだろうか。

視点の置き方としては、①伝承される方法や場、および②伝承が繰り返されていくプロセスにあると考えられる。

①については、人が人に対して、対面により語ら

れることに特徴がある。語り手は、相手の反応を見ながら声色や表情、身振り手振りも交え、情感を込めて伝えようとする。語られる場に応じて、聞き手に合わせて内容がアレンジされたり、言い方が変えられたりもする。つまり、語り手のコミュニケーションにおける身体性と内容への改変が、聞き手の心を捉えるべく、積極的に行われていくのである。

一方、②については、ある世代から次の世代へ、また伝えられる場が大きく影響する。昔話で語られる言葉は多くが方言だが、方言は世代により、また地域により変わっていく。内容についても、その世代での主要な考え方が強調されたり、地域に応じて物語に登場する具体的な名称が換えられたりと、変化する要素は多い。このように伝承のプロセスにおいては、世代ごとに繰り返されることや、伝承される地域が広がっていくことで、変化する機会はさらに増え、その内容も必然的に多様になっていく。

以上のように考えると、民話におけるコミュニケーションの特徴は、さまざまな要因による、その時々の変化にあることがわかる。ただ、いずれの変化も、その時々での聞き手の心をいかに捉え、喜んでもらえるかに腐心したことによるといえるだろう。

4. 事例分析

それでは次に、具体的な事例を通して、伝承における変化について考えていこう。

事例は、「子育て幽霊」を採り上げる。全国各地でみられる民話の1つだが、今回採り上げた地域は北陸の奥能登と越前嶺北、少し離れた太平洋側の相模西部、そしてさらに遠く離れた長崎北部である。その4地域で語られている内容について、伝承されているコンテンツ要素を中心に比較してみたい。なお、それぞれ主な内容比較は、付表のとおりである。

4-1. 「子育て幽霊」のあらすじ

まず、基本となるあらすじを確認しよう。『日本昔話ハンドブック新版』では、次のように簡単にまとめられている。

「女が毎晩一文銭を持って飴を買いに来るので、飴屋が怪しんであとをつけると、女は新墓へ消える。墓の中から赤子の泣き声がするので墓を掘り返してみると、死んだ妊婦のそばで、生まれた赤子が飴をなめているので、取り出して育てる。」(同p.115)

物語の構造としては、次の5つの部分に分けられる。

①女が銭で毎晩飴を買いに来る。②飴屋があとをつける。③墓場で赤子の泣き声をする。④墓を掘り返すと、死んだ妊婦のそばに赤子がいる。⑤取り出して赤子を育てる。

この物語は「飴買い幽霊」ともいわれ、落語の怪談噺にもなっている。また、明治時代に来日したラフカディア・ハーンが著した『日本の面影』にも、島根にある大雄寺にまつわる話として登場する、比較的有名な民話である。（『新編 日本の面影』p.105）

では、事例として採り上げた地域ごとの民話を詳しくみていこう。

4-2. 奥能登版

まず、物語が展開する場として、門前の総持寺、峨山和尚という具体名が出ている。そして、ある朝のお勤めの途中に、和尚が墓場の傍で赤子の泣き声を耳にする。そのことを気にしつつ、その晩寝ようとしていた時、寺男がやってきて、「和尚さま、若いあねさまがみやかし銭（さい銭）をとって行ったぞね」といった。そこで、和尚はすぐに後をつけた。すると、あねさまは飴屋に入っていった。しばらくすると、今度は墓場に向かった。その墓場では、その朝聞いた赤子の泣き声がまたしてきた。あねさまは小さな墓石の前で消えた後、赤子の泣き声が聞こえ、次に子守唄が聞こえてきた。和尚がその墓石に近づくと子守唄が聞こえなくなり、再び赤子の泣き声が聞こえた。その後、和尚は墓を掘り起こすと、飴をなめている赤子が死んだ女の傍にいた。和尚はかわいそうに思い、赤子を引き取り育てることにした。この赤子は、後年「通幻寂霊」という立派なお坊さんに育ったという。

この民話では、飴屋は飴を売るだけである。女の後をつけるのは和尚だ。また、飴を買う銭は、「さい銭」になっている。そして、赤子は「通幻寂霊」という立派なお坊さんに育てている。全体を通して、総持寺にちなむ物語に作り変えられていることがわかる。

一方、死んだ女が飴を買って、赤子を育てるところ、そして赤子を見つけた人が女の代わりに育てるところは、物語の骨子として変わっていない。

4-3. 越前嶺北版

こちらは、かなり短い話になっている。ある日の晩、飴屋にやせこけた女が一文銭で飴を買いに来る。それが毎晩続き、「これでもう、持っていた六文銭

もなくなった。あめも買えない」とつぶやいて、帰って行った。そこで、飴屋が不審に思い、後をつけていくと、墓場で消えた。翌日、女が消えたところの墓を掘ってみると、赤ん坊が飴をなめていた。傍らには、死んだ女がいて、首から下げていたはずの六文銭がなくなっていた。飴屋はかわいそうに思い、赤ん坊を連れて帰り大切に育てた。赤ん坊は大きくなり、「幸福な人」になったという。

この民話では、具体名が示されていない「ある飴屋」の話になっている。ただ、三途の川の渡し賃として死人に埋葬時与えられる六文銭については、丁寧に描かれている。この話でも、死んだ女が飴を買って赤子を育てるところ、そして女の代わりに赤子を見つけた人が育てるところは、物語の骨子として変わっていない。

4-4. 相模西部版

こちらも越前嶺北版と同様、簡単な短い話になっている。ある飴屋に毎晩、若い女が一文を持って飴を買いに来た。飴屋が不審に思い、後をつけてみると、女は寺の新墓のところで消えた。しばらくすると、赤ん坊の泣き声と、それをあやす女の声が聞こえた。飴屋は驚き、翌朝墓の施主に訳を話したところ、掘り起こすことになった。すると、死んだ女に抱かれた生まれたての赤ん坊がいた。「はらみつと（妊婦）が死んだらば、身二つにしてとむれえするもんだ。でないと、魂が血に迷って化けて出るだ」と。このように締めくくられている。

こちらの話は、越前嶺北版に似ているものの、赤ん坊を育てるところは削除されている。また、寺や和尚は出てこず、墓の施主に訳を話して掘り起こすことになっている。さらに、妊婦の葬り方を教訓的に述べる部分が追加されている。この話でも変わらず伝えられている部分は、死んだ女が銭で飴を買って、赤子を育てるところだけになっている。

4-5. 長崎北部版

こちらは、どんな日照りのときでも水が枯れない「幽霊井戸」の由来話として伝えられている。

ある夜、白い着物の二十四、五歳ぐらいの女が一文を持って飴を買いに来た。女は京訛りの言葉だった。それから毎晩買いに来たが、金が尽きて飴を恵んでやった折、飴屋は近所の若者と後をつけた。すると、光源寺の墓地で女が消えた。しばらくすると火の玉を目にし、赤ん坊の泣き声が聞こえたので、飴屋と若者は驚いて腰を抜かして逃げ帰った。翌朝、

光源寺の和尚さんに詳しく話し、その墓を掘り起こしてみると、生まれたばかりの男の赤ん坊が這い出てきた。

一方、新墓のいわれについても詳しく語られている。長崎にいた若い彫刻師の藤原清永が京都へ修行に行き、宿屋の娘と深い仲になった。しかし、清永は長崎で嫁を迎えることになり、帰郷した。京都の娘は後を追ったが、長旅の疲れで死んでしまった。その娘がこの幽霊だという。

さらに、一ヶ月ほど後、飴屋が夜寝していると、女が枕元にやってきて、何かお礼をしたいという。そこで、このあたりは夏に水が出なくなり困っていると伝えた。すると、後日女の案内で井戸が見つかった。それが現在「幽霊井戸」と呼ばれているものだ。また、生まれた子どもは無事に大きくなったと、簡単に述べられている。

長崎北部版は他の地域の話とは異なり、光源寺にまつわる話として、具体的で発展的な内容に作り上げられていることがわかる。とくに、赤ん坊の両親にまつわる話や、現在も寺に存在する「幽霊井戸」、さらに清永が作ったとされる幽霊の彫像にも絡められているところは、物語としてのリアルさを追究するものとなっており、説得力が増し完成度が高くなっている。唯一、生まれた赤ん坊のその後について、簡単に触れられる程度で終わっている点は、物語全体の詳しくさと比べ、もの足りなさが残る。

4-6. 分析結果

最初に挙げた物語の構造に立ち返り、考えてみよう。物語を構成している5つの部分は、以下の通りである。

- ①女が銭で毎晩飴を買いに来る。
- ②飴屋があとをつける。
- ③墓場で赤子の泣き声がする。
- ④墓を掘り返すと、死んだ妊婦のそばに赤子がいる。
- ⑤取り出して赤子を育てる。

紹介した4地域の民話を踏まえると、①③④が共通している。ただ、①は死者に埋葬時に添えられた6文銭の中の1文銭でない場合もある。②は飴屋が中心に語られるものと、寺や和尚が中心になるものがある。そして、⑤は見つけられた赤子は誰に育てられたか、その後どのように成長したかについて、描かれ方が多様に分かれる。また、全く触れられていない場合もある。

このように見てみると、妊婦が葬られた死後に赤子を生み、飴を与えて育てていたことが、この物語の共通する芯として位置づけられると仮説的に考え

られる。それ以外の部分は、それぞれ伝承された地域に応じて、抽象的な昔話として簡略化された場合や、逆に寺などその地域の具体的な名称と結びつけられて由来話として作り変えられ、より具体的で詳しい物語として発展していった場合があると推測できる。

この仮説は、この物語が伝承されたすべての地域の民話を洗い出して確認すれば、検証できるだろう。ただ、かつてTBSテレビで放映された『まんが日本昔ばなし』(放映日1976/8/7)では、墓の前に捨てられた赤子が泣いており、それを見かねた女の幽霊が、飴で育てていたという話になっている。かなり内容が変えられているが、脚本家が子ども向けにソフトな内容になるよう配慮したのか、それともある地域で実際に伝承されている内容なのかは、現時点では不明である。今後の検証の中で、確認したいと考えている。

5. 事例からの示唆

まず、伝承された4つの地域の内容比較を通して、次の3点がわかる。

①伝承されている共通部分、つまり変わらない物語の芯にあたる部分は、意外に限られている。今回の話では、「幽霊となった女が飴を買って赤子を育てたこと」に共通部分は絞られている。

②話の長さなど、内容の展開にバリエーションが多い。共通部分以外は、質量ともに地域によって大きな差が見られる。

③地域により差が生まれる方向としては、抽象的な短めの昔話になる場合と、具体名がアレンジされて、その土地の昔話として発展的に詳細に作り変えられる場合とに分けられる。

さらに、今回の事例から示唆されている点を、改めて考察してみよう。

まず、伝承される話で共通部分は限られているが、それが聞き手にとっていかに魅力的なポイントであるかが問われている。女が子育てすることは、どの時代であっても当たり前のことである。しかし、女が幽霊になっても子育てし続けることは、現実的にありえないと受け止めつつも、「愛は死を超える」ことへの不思議な魅力が示されており、その点が聞き手を魅了するポイントだと考えられる。つまり、伝承が広がるには、前提として「聞きどころが明確であること」がポイントだといえる。そして、テーマが「子育て」といった地域を超えた普遍的な話題

であることが、伝承を促進していると考えられる。

次に、話の柔軟性が伝承に不可欠であることがわかる。口承の場合は、「伝言ゲーム」に近い。その場、その時の状況に応じて、語られる内容は、聞きどころ以外は柔軟に変化する。口承による柔軟性が、バリエーションを増やし、語り継がれやすくしていることがわかる。言い方を変えれば、大元のテキストが曖昧であることが、逆に伝承しやすさを増しているのである。

民話の口承による伝承を、改めてコミュニケーションの視点から考えたとき、物語の芯となる「聞きどころ」があり、それが地域を超えた普遍的な話題であること、そして地域に応じて自由にアレンジできる物語の制約の少なさが、伝承を支え促進している要件であることが示唆されていると考えられる。

6. まとめ

今回の研究は、現代において口承の必要性を考えることをねらいとしている。

最後に、口承による民話の伝承のもつ現代的な意味について、現在わかっている範囲で以下まとめておきたい。

まず1つ目は、世代を超えた共通話題を増やすことだ。現在のネット社会では、主に同世代で自分の好みにあうネットワークが作られやすい。テレビがメディアの中で中心的な役割を担っていた時代であれば、テレビ番組やCMなどが世代を超えた共通話題となりやすかった。しかし、現在は若者のテレビ離れが目立っている。また、SNSのようなネット・メディアでは、関係が細分化され、世代を超えた幅広い共有関係が生まれにくい。

このように考えると、魅力的な物語としての民話を口承により共有できれば、物語を通して世代を超えた関係を広げていく可能性が出てくる。あくまで、その物語の話題性によるところは大きいですが、昔ながらの世代を超えたコミュニケーションの場が、現在失われがちな世代をつなぐ役割を担えるのではないかと考えられる。

2つ目は、口承という対面でのコミュニケーションの魅力味わう機会を生み出すことである。それは、演劇や落語などと相通じるところがある。口承による語り手の生み出すコミュニケーションの世界を体験することで、ネットによる動画やSNSでのコミュニケーションと異なる質を味わうことができる。簡単に言えば身体性を伴うコミュニケーション

の魅力を感じることで、自らのコミュニケーションの幅が広がられると考えられる。

そして3つ目は、民話が個人の楽しみを超えて、地域的话题となることにより、まちづくりにつながる可能性があることだ。たとえば、岡山市では「桃太郎」伝説をもとに、まちの魅力を生み出す努力が以前から行われている。今回採り上げた事例の「子育て幽霊」についても、京都のゆかりの地で「幽霊飴」が売られていたり、パワースポットとして各地の寺や特定の場所が、観光スポットになったりしている。民話は地域によりアレンジされながら、その土地に密接に結びつき根付いていく。これからも長く地域の魅力を表現し続けていくためには、地域の宝として各地の民話を掘り起こすことが大切であると考えられる。

ネット社会である現在に、あえて民話など口承文芸に注目することは、単に過去に目を向けることではない。これからの社会に向けて口承の魅力や意味を社会全体で共有しながら、物語がもたらすコミュニケーションの豊かさを忘れないためには、今こそ必要な視点だと確信している。

参考文献・資料

- 稲田浩二、稲田和子編『日本昔話ハンドブック新版』三省堂、2010
- 関敬吾著、小澤俊夫補訂『日本昔ばなしの型』小澤昔ばなし研究所、2013
- 柳田国男著『日本の昔話』新潮文庫、1983
- 柳田国男著『日本の伝説』新潮文庫、1977
- 清酒時男編『加賀・能登の民話 第二集』未来社、2016
- 杉原丈夫・石崎直義編『若狭・越前の民話 第一集』未来社、2016
- 安池正雄編『神奈川の民話』未来社、2015
- 吉松祐一編『長崎の民話 第二集』未来社、2016
- ラフカディオ・ハーン著、池田雅之訳『新編 日本 の面影』角川ソフィア文庫、2000

付表

●民話「子育て幽霊」の各地の内容比較

基本パターン	奥能登版	越前嶺北版	相模西部版	長崎北部版
①女が銭で、毎晩飴を買いに来る。	女が「みやかし銭」(さい銭)を盗んで、飴を買いに来る。	女が一文銭で、毎晩飴を買いに来る。	女が一文銭で、毎晩飴を買いに来る。	白い着物の24、25歳の女が一文銭で、毎晩飴を買いに来る。
②飴屋が女の後をつける。	(該当箇所なし)	飴屋が女の後をつけると、墓場で消えた。	飴屋が女の後をつけると、墓場で消えた。	飴屋が近所の若者と一緒に女の後をつけると、新墓で消えた。
③墓場で赤子の泣き声がある。	赤子の泣き声と子守唄が聞こえた。	(該当箇所なし)	赤子の泣き声と女のあやす声が聞こえた。	ホオズキのような火の玉と、赤子の泣き声が聞こえた。
④墓を掘り起こすと、死んだ妊婦の傍に、元気な赤子がいる。	和尚が墓を掘り起こすと、死んだ女の傍で赤子が飴玉をなめていた。	飴屋が墓を掘り起こすと、死んだ女の傍で赤子が飴玉をなめていた。女の六文銭も無くなっていた。	飴屋と墓の施主が墓を掘り起こすと、死んだ女の傍に、生まれたての赤子がいた。	和尚と飴屋と一緒に新墓を掘り起こすと、死んだ女の傍で生まれたての男の赤子がいた。
⑤取り出して赤子を育てる。	和尚が立派に育て、赤子は「通幻寂霊」になった。	飴屋が育て、赤子は「幸福な人」になった。	(該当箇所なし)	若い彫刻師の父親(藤原清永)が育てた。
⑥追加部分			妊婦の葬り方を教訓的に述べている。	後日、女がお礼に現れ、願い事を聞いてくれた。それが「幽霊井戸」の由来につながっている。
場の説明	門前の総持寺	墓場のみ	墓場のみ	長崎の光源寺